

ヒノキを奏でる里

アルプホルン事始め

安藤 直彦

最近と言ってもここ7、8年のことだが、アルプホルンにハマっている。アルプホルンといっても耳慣れない人多いと思うが、スイス発祥の3m以上もある長い木製の楽器である。テレビなどでご覧になったこともあるかもしれない。私もスイスでは広い牧場で牛を呼び集めたり、連絡用に使われていたが、のちに楽器として使われるようになった。私がアルプホルンを始めたのは長野県木曾川沿いにある大桑村で出会ったのがはじめてである。大桑村は「ヒノキを奏でる里」と銘打ってアルプホルンの普及に努めている珍しい村である。

武蔵野

国分寺で地域社会と自然と共生する

船橋 旭

名古屋から東京国分寺に移住して5年経ちました。名古屋では足助の旭地区で名古屋大学環境学部の高野雅夫教授が主宰されていた千年持続学校・すまいる講座に応募し、昔の農山村で見た助け合いの仕組み「講」を再生してUターンで農山村に移住して地域に根ざし地域で生き生きと暮らすという生き方を旨とした若い人たちに支援する取り組みに参加してました。

僕はこの取り組みへの参加の動機は都市の名古屋に住んでいて少しも持続可能な地域社会の生活の在り方を学び、若い人たちの取り組みに触れてみたいと思ったことと老後の自分の生活の在り方を研究したいと考えたからです。都市の典型的な地域社会から人と人とのつながりが親密で楽しく支えあう地域社会をいかにつくれるか(コミュニティの復活)を志向し挑戦したいと考えていたからです。

氏に、アルプホルンには玉川ホルンクラブの中川重年氏、コカリナは日本コカリナ協会の黒坂黒太郎氏に指導を依頼した。後二者は林業関連の方で資料を通じて知っていた。

しかし、木曾地域でも就労形態や生活様式が変化する中、山はなれが進み森林の手入れができなくなりつつあった。特に林業は3K(きつい、汚い、危険)とされ、若者の林業離れが進んでいた。昭和40年に8千人あった人口は平成9年には4千人と40年で半減していた。現在は3800人である。

武蔵野

聞き書き「への思い」

足助(愛知)

私、お年寄りの話を聞くのが好きだ。私の祖父はすでに他界している。両親ともに親戚づきあいが苦手だったので、祖父母との語らいの時間もあまりなかった。

このように問題はなかったかもしのの。演奏の方もいまの田中会長、副会長の中山さん、なくなった羽根さん、音楽に造詣の深い、あるいは関心の高い人が中心になり、一方、消防団のラッパなど吹奏経験者も集まった。消防団の経験者も音はずく出るがリズムの取り方が違うので最初は戸惑ったようだった。最初はスイスで研修して月前に村有林から数十本の間伐材を用意した。また、制作講座を開く前に人口に参加を呼びかけたところ30人以上が集まったと言われる。音楽に興味を持って人、消防団のラッパ手など多彩な人が集まったが、リタイア後の楽しみとして当時まだ流行っていたギターボーカルではありましたが、ホルンの演奏写真を見てユニホームがほしいという事で手を取った人も多かった。

聞き書き「へる思い」

足助(愛知)

「おまん、一人で仕事しつたら、ねすみにひかれるで、気がつけんと「ほんなこと、あじやない」「やうとかめたん」などなど、今では普通に自分も使っている言葉も、始めは「ななのこと？」だった。でも、なぜだか、心温かく、懐かしい心地よさがあった。山に暮らし人々の生き様の記録し、歴史を紡ぎ、未来の地域づくりの母と同期の方々とお話をすることを、新で静かに普及している。アルプホルンクラブは各クラブとも、制作の方は木工が専門の羽根さんを中心に例年各地から参加者が集まり盛會だった。残念ながら羽根さんは2年ほど前にお亡くなりになった。

武蔵野

鮎釣りにいろいろ教えてもらった

足助(愛知)

来たぞなんちゅうて、ガバガバしちゃうあかん。ほれじゃあ、鮎が警戒しちゃうだ。おつた鮎が知らん顔して、あんなふうに行っちゃった。そうやって、隠れておらにゃいかん。鮎釣りが上手なヤツを見ると、それがうたと川に降りてきて、ぼやんとやがたパコを吸って、のびりかきやがたパコ。しかも早よ釣りがやいやいって、下手なときはぼやんと釣って、日当たりがよくて、家賃が安くて、ほこが空き家にならずに、すぐに誰かが入る。ほれといっしよだ。

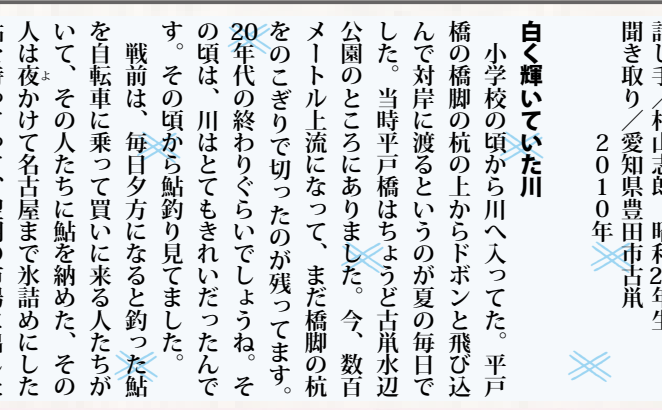
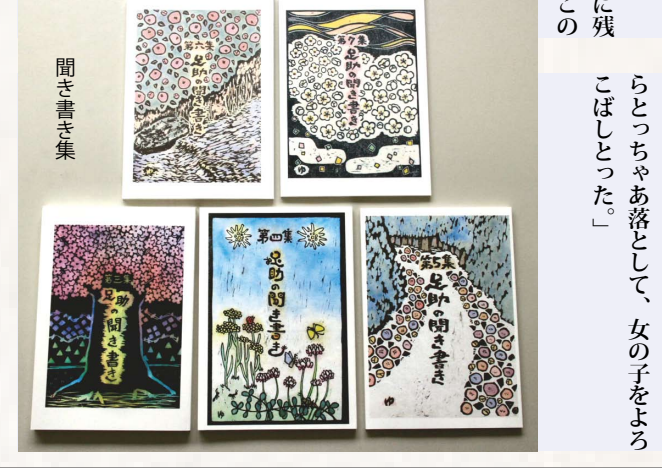
これからの活動予定は地元哲学者のフエにも参加して、国分寺の地域社会でもっと新しい仲間をつくりたいと考えています。市内で活動するいろんなサークルが緩やかなつながりを持ち、子どもたちが希望を語る国分寺、民主的で市民が支え合う住みやすい地域社会の未来が展望できればと考えています。更に欲張って自分たちの仲間と自然に恵まれた地域の農業を支えるために、農産物を産地消費する生活者のアソシエーションがつくれればと考えています。そしてこれらのサークル、アソシエーションが互いに繋がれば国分寺にコミュニティが生まれてくるのではと期待もしています。

鮎になめられてピカピカキラキラだった矢作川

豊田

話を手/村山志郎 昭和23年生聞き取り/愛知県豊田市古風 2010年

白く輝いていた川 小学校の頃から川へ入っていた。平戸橋の橋脚の杭の上からドボンと飛び込んで対岸に渡るというのが夏の毎日でした。当時平戸橋はちょうど古川水辺公園のところにありました。今、数百メートル上流になって、また橋脚の杭のこぎりで切ったのが残っています。20年度の終わりにいようね。その頃は、川はともきれいだっただけです。その頃からは鮎釣りが見えました。戦前は、毎日夕方になると釣った鮎を自転車に乗って買いに来る人たちがいて、その人たちに鮎を納めた。その人は後をつけて名古屋まで水詰めにした鮎を持って、翌朝の市場に出したという話をよく聞かれます。趣味で釣って楽しんでいようけど、それがとてもいい金になってよかったらしいです。みんなお酒飲んじゃったらしいです。



聞き書き集

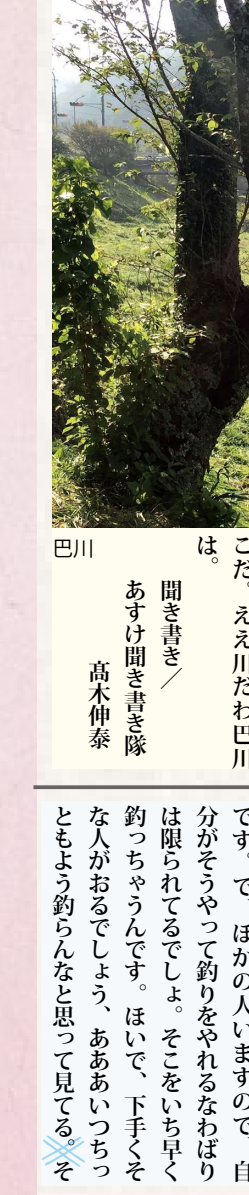
武蔵野

鮎釣りにいろいろ教えてもらった

足助(愛知)

川底が白く輝いているキラキラキリキリと音がして、綺麗なような砂が多かった。輝くような白い砂でした。イシャコ(カワヨシノボリ)がいたら川底に張り付けて、それを糸で、箱がねがねがら釣って、小さな竿で餌付けて見ながら釣って箱がねの中に入れて、ってことをよくやってました。

次々に飛びついてくる鮎 昔はねえ、ポイントに入らざるれば、攻撃的な姿勢をとられれば、瞬間的に釣れてしまいますね。もう瞬間です。矢作川には独特の釣り方がありまして。普通はおとり鮎を泳がせてポイントに連れていくんですけど、めんどくさいんです。だからさらさら泳いで、長い竿で自分が釣りたいと思うところまで空中をブーンと飛ばすんです。そこへ着水と同時に釣れる。だから、ポイントがそことあそことあそこと分かりますので、次々に瞬間的に釣り上げてちゃやうんです。で、ほかの人もいますので、自分が釣って釣るやれるなほりは限られてるでしょ。そこをいち早く釣っちゃうんです。ほいで、下手こそな人がおるんですよ。あああいつちよとも釣らんと思ってるよ。



聞き書き 高木伸泰